



# 近世仮名遣い研究史における『和字正濫鈔』の再検討——『類字仮名遣』と『初心仮名遣』との比較から——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学語学文学会 公開日: 2021-12-09 キーワード: 作成者: 久田, 行雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00010721">https://doi.org/10.32150/00010721</a>

# 近世仮名遣い研究史における『和字正濫鈔』の再検討

——『類字仮名遣』と『初心仮名遣』との比較から——

久 田 行 雄

## 一、はじめに

近世に刊行された契沖『和字正濫鈔』（元禄八年（一六九五）刊）は、歴史的仮名遣いを明らかにしたことで学問的に高く評価されてきた。しかし、その成果については仮名遣いの根拠を古代の文献に基づいて示した「歴史的仮名遣いの発見」という観点にのみ焦点が当てられ、仮名遣いにおける学問の連続性という観点からは顧みられてこなかった。『和字正濫鈔』がそれまで信奉されてきた仮名遣いを正そうとする意図で執筆されたことを踏まえると、収録語の選定やその注釈を行う際には同時代もしくはそれ以前の仮名遣い書の記述を把握しておかなければならなかったはずである。よって『和字正濫鈔』は先行仮名遣い書との関連を持つはずであるが、この点については検討されてこなかった。近世における仮名遣い研究史の中で『和字正濫鈔』の位置づけを改めて検討するためにも、先行する仮名遣い書と『和字正濫鈔』との関係を今一度問い直すべきであると考ええる。

本稿では、『和字正濫鈔』と『和字正濫鈔』に先行する仮名遣い書を対照させることで、『和字正濫鈔』と先行仮名遣い書との関連性を明らかにする。対照させる際には、特に『和字正濫鈔』において典拠が示されていない語に着目することで、『和字正濫鈔』が先行仮名遣い書の成果をどの程度継承しているのかを具体的に明らかにする。これらの作業を通して、仮名遣い研究史における『和字正濫鈔』の再定置を行う。

## 二、『和字正濫鈔』に典拠が示されていない語について

『和字正濫鈔』はそれまでの仮名遣い書とは異なり、仮名遣いを古代の文献に基づきながら提示したことにより学術的に評価されてきた。その評価は中世において学問成果を秘説とする立場から近世において客観的な根拠を示す実証主義へ移っていくという学問に対する意識の変化と結びつけて論じられてきた。『和字正濫鈔』はこのような観点から高い評価がなされてきたが、掲載された語の全てにおいて典拠が示されているわけ

ではなく、その表記の根拠が不明な語が存在している。

『和字正濫鈔』において表記の典拠が示されていない語については既に拙稿でその数を明らかにした<sup>1)</sup>。『和字正濫鈔』に掲載された二〇四〇語の中で典拠が示されていない語は八三七語あり、これは『和字正濫鈔』の約四割を占める。典拠が示されていない語については、以下に示すように①語釈に一切の情報が記載されていないものや、②語釈に多くの情報が記載されていないながらも表記の典拠については記載されていないもの、③「和名」などの古代の文献の書名が見られるものの掲載語の典拠を示したわけではないものなど、その内実はさまざまである。(適宜句読点を補った。引用は以下同じ。)

① 憩 いこふ (卷二)

② 雖 いへども いふとも同じ。いへどもは、すでにさはいへども<sup>2)</sup>の意。いふともは、たとひ何といふともと、後を懸ていふ。共に縦奪の言なり。梓弓ひけどひかねど。此ふたつのども雖なり。

思ふともこふともあはむ物なれや。此ふたつのども、雖なり。たのめずは人をまつちの山なりと。かやうのども雖なり。人はいへども、人はいふとも、かやうなるは雖<sup>イフモト</sup>言<sup>コト</sup>にて一字にあらず。心を著へし (卷二)

③ 鞞 しりかい 和名には、しりかき。俗にきといを通して

かくいへり、しりかきも、きとけを通して尻<sup>シ</sup>繋<sup>ツ</sup>なるへし (卷二)

記載された情報からは典拠として記されたのかどうかの判断に窮する語も存在するため、先の数値を絶対視するわけではない。もつとも、典拠が記されていない語の中には語釈が全く記載されていない語が四一八語も存在しており、この数は『和字正濫鈔』全体から見ても約二割に相当する。このことを踏まえると、『和字正濫鈔』において典拠が示されていない語は単に典拠を記載し忘れたものではないと考えられる。

これらの語において表記の典拠が示されていない理由については慎重に考察すべきであるが、これらの語が何の典拠もなしに記載されたものであるとは想定しがたい。実証主義と評される契沖の学問的姿勢を考慮すれば、これらの語においても何らかの典拠となる書物が存在したと推測される。なお、古代の文献に基づいて示したのであれば、そのことを明示したと考えられるため、これらの語の典拠は古代の文献である可能性は低いと考えられる。

典拠の候補としてまず考えられるのは、『和字正濫鈔』以前の仮名遣い書であろう。学問成果を新しく示すためには、それまでの学問成果を把握しておく必要がある、契沖も先行する仮名遣い書を参照していたはずである。先行する仮名遣い書の中には契沖の学問的見地から見て正しい仮名遣いも記載されてい

たはずであり、それらを『和字正濫鈔』執筆の際の参考にしてきた可能性がある。従来の研究では『和字正濫鈔』を画期的な成果と見なすあまり、先行する仮名遣い書との関係についての検討は疎かにされてきた。よって、『和字正濫鈔』における先行仮名遣い書からの影響を検討する余地があると言える。

そこで、本稿では『和字正濫鈔』に先行する仮名遣い書の中でも、荒木田盛徴『類字仮名遣』(寛文六年(一六六六)刊)と『初心仮名遣』(元禄四年(一六九二)刊)を対象として『和字正濫鈔』との比較を行う。これらの作業を通して、『和字正濫鈔』の成立における先行仮名遣い書の影響を明らかにする。

### 三、調査方法

本稿の調査には元禄八年版『和字正濫鈔』(中河喜兵衛・中河五郎兵衛版)を使用する。また、『和字正濫鈔』は五卷五冊からなる書物であるが、巻二から巻五に仮名遣いに関する語が示されているため、巻二から巻五を調査対象とする。

本稿では『類字仮名遣』と『初心仮名遣』を『和字正濫鈔』と対照させる。この二書は『和字正濫鈔』より先に出版された板本の仮名遣い書である。近世には板本だけでなく写本の仮名遣い書も存在していたが、契沖が写本および板本の仮名遣い書をどの程度閲覧できていたのかは明らかにされていない。写本と比べれば、板本の仮名遣い書は容易に入手・閲覧しえたはずであると考え、本稿では板本を比較対象とすることとした。板

本の仮名遣い書の中でも、『類字仮名遣』(寛文六年(一六六六)刊)と『初心仮名遣』(元禄四年(一六九二)刊)を対象とする。

荒木田盛徴『類字仮名遣』(寛文六年(一六六六)刊)は、七卷一冊の大部な仮名遣い書である。序文の記述から定家仮名遣いの系統に属する仮名遣い書であると指摘されてきたが、今野信二氏による再評価が行われている。今野氏は『類字仮名遣』の典故として示される文献には『日本書紀』や『和名類聚抄』、『多識編』、『源氏物語』、『詞林三知抄』、『藻塩草』などがあり、その種類が多岐にわたることから、『類字仮名遣』は定家仮名遣い系統の仮名遣い書でありながらも、複数の文字社会との関わりを持つ、多様性と重層性を兼ね備えた仮名遣い書であると指摘する。

『初心仮名遣』(元禄四年(一六九二)刊)は、著者未詳の一冊からなる仮名遣い書であり、定家仮名遣いの系統に属する仮名遣い書と評されてきた。初心者のために執筆された仮名遣い書であり、上段に誤用例、中段に正しい例、下段に漢字表記と三段に分けて示す点に特徴がある。

『類字仮名遣』と『初心仮名遣』は、既に記した通り、従来は定家仮名遣いの系統に属する仮名遣い書と評されてきた。そのため、定家仮名遣いの誤りを正す目的で執筆された『和字正濫鈔』の姿勢を鑑みれば、対照作業を行う仮名遣い書として適切ではないとも考えられる。しかし、今野真二氏が指摘してい

るように、仮名遣い書を定家仮名遣いと歴史的仮名遣いという二項対立的な枠組みだけで捉えようとすることには限界がある。『類字仮名遣』は先にも指摘した通り、多くの語を収録しており、それらの語の中には定家仮名遣い系統の仮名遣い書では取り上げられてこなかった語も多く含まれている。また、『初心仮名遣』についても、必ずしも全ての語が定家仮名遣いと合致するわけではないことを久保田篤氏が明らかにしている。また、久保田氏は『初心仮名遣』には定家仮名遣い系統の書物では確認できないような語が収録されていることも指摘している。すなわち、『類字仮名遣』と『初心仮名遣』は共に、定家仮名遣い系統に属する仮名遣い書という一面的な見方で済まされるような仮名遣い書ではないことが分かる。以上のことを踏まえ、本稿ではこの二書が適切だと判断した。

この二書と『和字正濫鈔』の対照作業は、それぞれの収録語を入力したデータを比較する方法をとる。『和字正濫鈔』と『類字仮名遣』『初心仮名遣』は、それぞれ掲載語の排列の仕方が異なるためである。『和字正濫鈔』は仮名遣いで問題となる仮名が含まれている語を項目毎にイロハ順で記載する。一方、『類字仮名遣』は語頭にくる仮名のイロハ順で掲載されており、『初心仮名遣』は意義分類となっている。そのため、仮名遣い書同士を単に比較させるだけでは見落としが発生する可能性が存在する。それを防ぐために、入力したデータを用いて作業を行う。

『和字正濫鈔』においては、漢字表記と仮名表記および語釈

が記されている。対照作業では、仮名表記と漢字表記が合致しているかどうかを確認する。もともと、漢字表記については仮名表記の意味を確定するための参考とするに留め、完全に一致しなくても対照できるものとし、合致するかどうかを確認する。

『類字仮名遣』と『初心仮名遣』には、『和字正濫鈔』に記載された全ての語が掲載されているわけではない。そのため、対照が行える語と行えない語が存在し、対照が行える語の中には、仮名表記が合致するものもあれば、合致しないものも確認される。これらの対照を行える語に関しては、『和字正濫鈔』が収録語を選定する際の参考になった可能性が考えられる。そのため、これらの語は仮名表記が合致しない語も含め、『和字正濫鈔』と先行仮名遣い書の影響関係を見ていく上で重要である。これらの語については、次節で詳しく見ていく。

対照作業において、比較する書物同士で必ずしも同じ語が掲載されているわけではない。しかし、同じ語が掲載されていない語が掲載されるが、『類字仮名遣』『初心仮名遣』では共に「稲」を確認することはできない。ただし、『類字仮名遣』には「いねになふ稲荷擔」「いねのかりしほ稲刈人」があるため、「稲」が「いね」であることが分かる。本稿の調査ではこのような例は対照可能な例として扱った。また、『和字正濫鈔』において「生 おふ」とあるが、『類字仮名遣』で「おふる 生」とあるような動詞の活用形が異なるものについても対照可能な

例と見なした。そして、これらの語は合致したものと見なした。

また、『類字仮名遣』『初心仮名遣』は収録語に記載された仮名表記が必ずしも一つではなく、複数存在する場合がある。一方、『和字正濫鈔』に記載される語は原則として一通りの表記しか記載されていない。そのため、『和字正濫鈔』と合致するが、その他にも複数の仮名表記が掲載された語に関しては、合致した例と見なすが、その例は個別に示す。

以下、『和字正濫鈔』と『類字仮名遣』『初心仮名遣』を対照させ、契沖が『和字正濫鈔』を執筆する際に先行する仮名遣い書をどの程度参照していたのかを明らかにする。

#### 四、『和字正濫鈔』と先行する仮名遣い書との関係

調査の結果、『和字正濫鈔』の二〇四語と対照が行えたのは、『類字仮名遣』で一〇四八語、『和字正濫鈔』の約51%、『初心仮名遣』で四二〇語(同約21%)であった。その中でも、『類字仮名遣』は九二二語(その内、複数仮名表記掲載語は一七語)、『初心仮名遣』は三三三語(同三語)と合致することが明らかとなった。これはそれぞれ『和字正濫鈔』の約45%と約17%にあたる。『初心仮名遣』との合致率は約17%と高くはないものの、『類字仮名遣』との合致率は約45%であり、五割には達しないもののその割合は低くないことが指摘できる。また、これら両書をあわせた合致する語の総数は九九一語であり、『和字正濫

鈔』の約49%にあたる。

合致している語を『和字正濫鈔』の項目毎に示したのが、以下の【表1】である。この表を見ると、『類字仮名遣』『初心仮名遣』ともにそれぞれの合致率は巻や項目による差がないことが分かる。『類字仮名遣』においては、巻四が他の巻に比べ若干割合が高いものの、項目毎の合致率は30%から60%の間であることが指摘できる。その一方、『初心仮名遣』の合致率は『類字仮名遣』ほど高くなく、10%から30%の間であることが分かる。

また、『和字正濫鈔』において典拠が記されていない語に着目すると、対照可能な語は八三七語の中で、『類字仮名遣』で五四三語(約65%)、『初心仮名遣』で二六四語(約32%)であった。その中で合致するのは、それぞれ五〇四語、二二一語であり、これらは典拠がない語の約60%と約28%にあたる。『和字正濫鈔』全体と対照させたときと比べて、『類字仮名遣』『初心仮名遣』ともに合致率が高くなっていることが指摘できる。その中でも、『類字仮名遣』に関しては約60%も合致しており、その合致率の高さが注目される。これら両書をあわせた合致する語の総数は五四二語であり、典拠のない語の約65%にあたる。この結果を『和字正濫鈔』の項目毎に示したのが【表2】である。【表2】を見ると、『類字仮名遣』は巻五における合致率はその他の巻に比べ低いが、他の巻では約60%と同じような数値になっていることが分かる。また『初心仮名遣』においても

【表1】『和字正濫鈔』と『類字仮名遣』『初心仮名遣』との対照結果

巻	項目	総数	類字仮名遣					初心仮名遣				
			対照可能	合致		不一致	対照可能	合致		不一致		
				回数	率			回数	率			
巻2	い	231	115	110	48%		5	35	32	14%		3
巻2	中下のい	90	42	38	42%	1	4	8	7	8%	1	1
巻2	ゐ	21	13	12	57%	1	1	6	5	24%		1
巻2	中下のゐ	37	23	19	51%		4	8	7	19%		1
巻2	ひ	192	107	91	47%	8	16	40	33	17%	1	7
	巻2合計	571	300	270	47%	10	30	97	84	15%	2	13
巻3	を	96	60	39	41%	1	21	24	21	22%		3
巻3	中下のを	60	32	26	43%		6	21	18	30%	1	3
巻3	お	197	102	66	34%	1	36	47	22	11%		25
巻3	中下のお	26	14	10	38%		4	3	3	12%		
巻3	中下のほ	83	46	40	48%	2	6	26	21	25%		5
	巻3合計	462	254	181	39%	4	73	121	85	18%	1	36
巻4	え	49	27	26	53%		1	7	7	14%		
巻4	中下のえ	55	33	31	56%		2	8	8	15%		
巻4	ゑ	25	17	16	64%		1	4	3	12%		1
巻4	中下のゑ	29	15	14	48%	2	1	5	3	10%		2
巻4	中下のへ	80	47	45	56%		2	28	27	34%		1
巻4	中下のわ	47	13	7	15%		6	3	1	2%		2
巻4	中下のは	173	99	97	56%		2	51	49	28%		2
巻4	中下のう	112	59	56	50%		3	16	14	13%		2
	巻4合計	570	310	292	51%	2	18	122	112	20%	0	10
巻5	中下のふ	99	36	33	33%		3	17	13	13%		4
巻5	むとうとまきる、詞	21	6	6	29%			1	1	5%		
巻5	うとむとかよふ類	5	3	3	60%			1	1	20%		
巻5	うとぬとかよふ類	3	0	0	0%			0	0	0%		
巻5	むとぬとかよふ類	3	0	0	0%			0	0	0%		
巻5	むともとかよふ類	9	2	2	22%			0	0	0%		
巻5	むとふとかよふ類	1	0	0	0%			0	0	0%		
巻5	ふともとかよふ類	1	1	1	100%			0	0	0%		
巻5	へとめとかよふ類	9	2	2	22%			0	0	0%		
巻5	めと聞ゆるへもし	2	1	1	50%			0	0	0%		
巻5	むにまかふふ	22	15	15	68%			6	6	27%		
巻5	みにまかふひ	8	3	3	38%			1	1	13%		
巻5	をと聞ゆるふ	6	4	4	67%			4	4	67%		
巻5	みをうといふ類少々	6	2	2	33%			2	2	33%		
巻5	みをむといふ類少々	8	1	1	13%			2	2	25%		
巻5	仮名にたかひていふ類	2	1	1	50%			1	1	50%		
巻5	中下に濁るち	46	25	24	52%	1	1	13	12	26%		1
巻5	中下に濁るし	56	31	31	55%			6	6	11%		
巻5	中下に濁るつ	95	38	38	40%			21	19	20%		2
巻5	中下に濁るす	32	11	11	34%			3	3	9%		
巻5	何ろふといふ言の類	3	2	1	33%		1	2	1	33%		1
	巻5合計	437	184	179	41%	1	5	80	72	16%	0	8
	全体合計	2040	1048	922	45%	17	126	420	353	17%	3	67

【表2】『和字正濫鈔』の「典拠なし」と『類字仮名遣』『初心仮名遣』との対照結果

巻	項目	総数	典拠なし	類字仮名遣					初心仮名遣				
				対照可能	合致			不一致	対照可能	合致			不一致
					回数	割合	複数			回数	割合	複数	
巻2	い	231	111	75	73	66%		2	26	24	22%		2
巻2	中下のい	90	41	29	26	63%	1	3	6	6	15%		1
巻2	ゐ	21	8	7	7	88%			3	2	25%		1
巻2	中下のゐ	37	14	10	8	57%		2	5	4	29%		1
巻2	ひ	192	39	27	23	59%	1	4	17	13	33%		4
	巻2合計	571	213	148	137	64%	2	11	57	49	23%	1	8
巻3	を	96	32	27	18	56%		9	13	12	38%		1
巻3	中下のを	60	14	12	12	86%			7	7	50%		
巻3	お	197	59	42	31	53%		11	20	10	17%		10
巻3	中下のお	26	2	1	1	50%			1	1	50%		
巻3	中下のほ	83	40	31	27	68%		4	17	13	33%		4
	巻3合計	462	147	113	89	61%	0	24	58	43	29%	0	15
巻4	え	49	21	13	13	62%			5	5	24%		
巻4	中下のえ	55	27	14	14	52%			4	4	15%		
巻4	ゑ	25	7	5	5	71%		1	3	2	29%		1
巻4	中下のゑ	29	6	5	5	83%			2	2	33%		
巻4	中下のへ	80	35	28	28	80%			20	20	57%		
巻4	中下のわ	47	5	0	0	0%			0	0	0%		
巻4	中下のは	173	71	54	53	75%			37	35	49%		2
巻4	中下のう	112	62	41	41	66%		1	13	11	18%		2
	巻4合計	570	234	161	159	68%	0	2	84	79	34%	0	5
巻5	中下のふ	99	31	19	17	55%		2	12	9	29%		3
巻5	むとうとまきるゝ詞	21	6	0	0	0%			0	0	0%		
巻5	うとむとかよふ類	5	0	0	0	0%			0	0	0%		
巻5	うとぬとかよふ類	3	1	0	0	0%			0	0	0%		
巻5	むとぬとかよふ類	3	1	0	0	0%			0	0	0%		
巻5	むともとかよふ類	9	3	1	1	33%			0	0	0%		
巻5	むとふとかよふ類	1	1	0	0	0%			0	0	0%		
巻5	ふともとかよふ類	1	0	0	0	0%			0	0	0%		
巻5	へとめとかよふ類	9	2	1	1	50%			0	0	0%		
巻5	めと聞ゆるへもし	2	1	1	1	100%			0	0	0%		
巻5	むにまかふふ	22	20	14	14	70%			6	6	30%		
巻5	みにまかふひ	8	7	3	3	43%			1	1	14%		
巻5	をと聞ゆるふ	6	6	4	4	67%			4	4	67%		
巻5	みをうといふ類少々	6	6	2	2	33%			2	2	33%		
巻5	みをむといふ類少々	8	8	1	1	13%			2	2	25%		
巻5	仮名にたかひていふ類	2	1	1	1	100%			1	1	100%		
巻5	中下に濁るち	46	26	15	15	58%			9	9	35%		
巻5	中下に濁るし	56	32	18	18	56%			5	5	16%		
巻5	中下に濁るつ	95	72	33	33	46%			19	17	24%		2
巻5	中下に濁るす	32	18	7	7	39%			3	3	17%		
巻5	何ろふといふ言の類	3	1	1	1	100%			1	1	100%		
	巻5合計	437	243	120	119	49%	0	2	65	60	25%	0	5
	全体合計	2040	837	543	504	60%	2	39	264	231	28%	1	33

巻による差異は見られない。【表1】と【表2】の結果から、『和字正濫鈔』の特定の項目や巻においてのみ合致するのではなく、全体を通して合致していることが分かる。

また、『類字仮名遣』『初心仮名遣』と対照させて、『和字正濫鈔』と合致しなかった語（【表1】における「不一致」の数）は、それぞれ一二六語、六七語であった。<sup>10</sup>『類字仮名遣』『初心仮名遣』ともに巻三における不一致の数が多いことが指摘できる。

## 五、『類字仮名遣』『初心仮名遣』と合致する語

について

これまで確認してきた通り、『和字正濫鈔』と『類字仮名遣』『初心仮名遣』には合致する語が存在している。本節では、合致する語の中でも特徴的なものについて述べる。以下、語釈に「未考」と記された語、字音語についてそれぞれ見ていく。

まず語釈に「未考」と記された語について着目する。『和字正濫鈔』には典拠が記されていない語が存在するが、その中には以下に示すように語釈に「未考」と記される語が存在している。

怠 をこたり 未考（巻三）

行器 ほかる 外居とも。未考（巻二）

操 みさほ 未考。もし操行の竿のことくなくしてたわま

ぬたとひならば。みさをと書へきにや（巻三）

これらの語は仮名表記と漢字表記は記されているが、「未考」と記されていることから、その表記の根拠については契沖も確証が持てなかったものであると考えられる。その中には語釈に「みさをと書へきにや」と記されたように、提示した仮名表記に対して疑問を示すものも存在する。

『和字正濫鈔』の語釈において、このように「未考」と記される語が四五語確認される。<sup>11</sup>これらの語の中には「未考」とありながらも典拠が記載されたものも九語存在するが、その他の三六語には典拠の記載が見られない。この三六語の中で二七語が『類字仮名遣』『初心仮名遣』と対照可能であり、その中の二二語（「未考」の典拠なし語の61%）が合致していることが明らかとなった。

「未考」とされながらも、『和字正濫鈔』においてこれらの語が掲載されているのは、古代の文献に基づくものではないが、それに準ずる程度に仮名遣いを示すための根拠として相応しい資料があったからだと推測される。そのように推測できる「未考」の語において、その多くが『類字仮名遣』と『初心仮名遣』と合致していることは注目に値する。<sup>12</sup>

次に、字音語について見ていく。仮名遣いは和歌や連歌に関わる場で意識されたものであったことから、仮名遣いで問題とされる語は和語が専らであった。しかし、時代が下るにつれて

徐々に漢語や字音に関する仮名遣いも問題とされるようになってきた。『和字正濫鈔』にも字音語が含まれており、そのことは築島裕氏が既に指摘している<sup>13</sup>。また、築島氏は『和字正濫鈔』に記載されている字音語にはほとんど典拠が記されていないことを指摘し、これらの語は「多分、契沖が見た古書などによったのかも知れない」と述べている。そこで『和字正濫鈔』に掲載された字音語を調査したところ、『和字正濫鈔』には六八語の字音語が確認された。その中で四五語が『類字仮名遣』『初心仮名遣』と対照可能であり、三八語(約56%)が合致していることが明らかとなった。

「未考」と記された語や字音語といった『和字正濫鈔』において周辺のな語に着目してきたが、これらの語には『類字仮名遣』『初心仮名遣』と合致する例が多く確認されることが明らかとなった。このような周辺のな語は、契沖が一つ一つを個別の書物から引用したと見なすことも可能である。しかし、確認した通り、これらの語は『類字仮名遣』や『初心仮名遣』との合致率が高いことを踏まえると、これらの語は先行仮名遣い書を参照して契沖が『和字正濫鈔』に掲載した可能性があると十分考えられるだろう。

## 六、おわりに

本稿では『和字正濫鈔』と『類字仮名遣』『初心仮名遣』を対照し、『和字正濫鈔』が先行する仮名遣い書の成果をどの程

度継承しているかを明らかにした。『和字正濫鈔』は仮名遣い研究史上において画期的な成果と見なされてきたが、『類字仮名遣』や『初心仮名遣』と合致する語が少なからず存在すること、また、『和字正濫鈔』において典拠が示されていない語に限れば『類字仮名遣』『初心仮名遣』との合致率は約65%となることが明らかとなった。この結果から、『和字正濫鈔』は先行仮名遣い書からの成果を引き継ぎながら成立したものであるということが指摘できるだろう。『和字正濫鈔』を「歴史的仮名遣いの発見」という観点からのみ捉えることによって捨象されてしまう、このような点については見落としてはならない。

本稿の調査により、『和字正濫鈔』の多くの語が『類字仮名遣』『初心仮名遣』と合致していることが明らかになったが、このことによりすぐさま『和字正濫鈔』がこの二書からこれらの語を直接引用したと見なすことはできない。『類字仮名遣』や『初心仮名遣』に記載された語は、定家仮名遣い系統の仮名遣い書と合致するものもあるはずであり、他の仮名遣い書から引用した可能性も考えられる。今後、『仮名文字遣』を含めた定家仮名遣い系統の仮名遣い書との対照も行う必要があると言えよう。

『和字正濫鈔』はそれ以後の仮名遣い研究において重要視されたことは言うまでもない。楳取魚彦『古言梯』(明和元年(一七六四)成)やそれに連なる仮名遣い書は、契沖の学問的姿勢を受け継いでいる。しかし、注意を要するのは『和字正濫鈔』と『古言梯』との連続性を評価するあまり、『和字正濫鈔』と

連続しない部分を見落としてしまうことである。学問的姿勢からすれば、『古言梯』は『和字正濫鈔』を引き継いだものであると言えらるだろうが、『古言梯』は『和字正濫鈔』の掲載語の全てを掲載しているわけではない。『和字正濫鈔』が与えた影響を明らかにするためには、本稿で行ったような掲載語の比較を通して『古言梯』と『和字正濫鈔』の関係を明らかにしていく必要がある。これらのことを踏まえ、仮名遣い研究史上における『和字正濫鈔』の位置づけについては更に検討していくことが求められる。

## 注

- (1) 久田行雄『和字正濫鈔』における典拠小考(『国語論集』18、二〇二一年)。
- (2) 拙稿においては八三五語としていたが、誤りがあったため修正した。
- (3) 高瀬正一氏や長谷川千秋氏の調査により、『和字正濫鈔』の中にも慶長版『仮名文字遣』と合致する語が少なからず存在していることが明らかにされている(高瀬正一『和字正濫鈔』における定家仮名遣いについて―批判と受容の実態―(『国語国文学報』55、一九九七年)、長谷川千秋『和字正濫鈔』は仮名遣い書か(『国語文字史の研究』15、和泉書院、二〇一六年)。なお、両氏の調査はともに『和字正濫鈔』と『仮名文字遣』の部分的な調査であるため、全

体的な調査が必要である。

- (4) 『和字正濫鈔』より以前に出版された仮名遣い書としては、定家仮名遣いを代表する『仮名文字遣』も存在する。しかし、『和字正濫鈔』は定家仮名遣いの誤りを正す意図を持って書かれた著作であるため、『仮名文字遣』を典拠として利用した可能性は低いと考え、まずは『類字仮名遣』と『初心仮名遣』を対象とした。なお、注3にも記した通り、『和字正濫鈔』と『仮名文字遣』には合致する語も存在しており、その影響関係については詳細な調査が必要である。
- (5) 今野真二『類字仮名遣』の辞書的傾向(『国文学研究』141、二〇〇三年、後に『仮名遣書論攷』(和泉書院、二〇一六年)に再録)。
- (6) 注5前掲論文。
- (7) 久保田篤『初心仮名遣』における和語の「い・ひ・ゐ」について(『成蹊国文』49、二〇一六年)。
- (8) 例えば、『和字正濫鈔』において「少男をとこ」という語が掲載されており、語釈には語源から考えて「を」の仮名を使うのが正しく「おとこ」は間違いであると記載する。その語源に基づいて漢字表記はあえて「少」の字を書いたと考えられる。一方、『初心仮名遣』に「を(お)とこ」と記載されておらず、『類字仮名遣』においては「男おとこ」と記されている。このように『和字正濫鈔』と『類字仮名遣』に掲載された語は同じ語を指しているが漢字表記

が異なっている。このような例が多く確認されたため、仮名表記を中心に対照させて漢字表記は参考に留めることとした（この場合の仮名表記は不一致）。そのため、「あさかは牽牛子」「あさかは朝顔」のような例も合致したものとして扱ったことを断っておく。

(9) 『和字正濫鈔』の延べ語数は二〇四〇語であり、異なり語数は一九三五語であるが、対照作業は延べ語数で行った。

(10) もっとも、この「不一致」に掲載された数は必ずしも項目の仮名が問題となっているわけではない。例えば、「い」の項目における不一致は五例あるが、三例は「い」ではない箇所のの仮名遣いの不一致である（例：「いきとほり」「いきとをり」）。

(11) 語釈の中には「清濁未考」とするものが三語確認されるが、この三語は除いている。

(12) 『和字正濫鈔』の漢字表記には「真名未考」と記される語が五九語存在する。この中の二三語は『類字仮名遣』に合致することを指摘しておく。

(13) 築島裕「歴史的仮名遣いその成立と特徴」（中央公論社、一九八六年）。

〔付記〕本稿はJSPS科研費（JP20K21954）の助成を受けたものである。